

新連載コラム 『夜より深い闇へのまなざし』（第1回）

齋藤理一郎 群馬県立前橋清陵高等学校（夜間部定時制）教諭
（英語科）・特別支援教育士（S.E.N.S）

2024年3月。夜間部定時制高校での1年目が終わろうとしています。前任も定時制高校（昼間部）で、13年勤めていたので、「定時制」のことは分かっているつもりでしたが、学校や部（昼・夜）が違っていると、なかなかどうして文化や価値観が変わると感じます。自分が積み上げてきた経験と常識が通用しないものもあるし、逆に、「なるほど、こういうやり方があったのか。今までの思考停止の悩みは何だったんだろう？」と新鮮な気づきを得られることもあります。

夜の学校の生徒たち

ぐんま教育文化フォーラムに参加しているみなさんは、教職経験が豊富な方が多いと思いますが、定時制、その中でも夜間部定時制、そして「三修制（一般的に定時制は4年で卒業ですが、在籍3年で卒業が可能な制度）」の単位制となると、あまり馴染みがないかもしれません。実際、定時制高校に入学してくるのは、はどんな生徒たちなのでしょう。

アルバイトをしている生徒は多いですが、かつてのような『勤労学生』は夜間部定時制にも少ないです。ほとんどが中学卒業の15歳で入学してきます。不登校を経験している生徒は多く、小・中学校でほとんど教室に入っていない、一斉授業や集団生活の経験が少ないこともあります。また、世の中でも認知度が高まっている発達障がい、その傾向が強い生徒が多い印象です。周囲との間に苦勞して、疲れてしまったり、トラブルになったりすることもあります。

夜間部定時制に通う生徒は、こんなタイプの子たちです。逆の言い方をすれば、こういうタイプの子たちが、「育ちと学び」を期待して、夜間部を選び、入学してきます。一律に学科試験の点数だけでは区切れない、さまざま

まな個性や特徴がある生徒が集まるのが「夜の学校」だといえます。

生徒それぞれの事情に寄り添って

全日制高校や、義務教育の学校での生徒との関わりが長いと、学習活動でも学校行事でも、「みんなで一丸となって物事に取り組もう」とか、「信頼と協力で困難な課題を乗り越えよう」とか、「目標を達成するために努力を継続しよう」のようなことばで生徒を鼓舞することがあります。そんな交流を通して得た成果や達成感は、教員にとっても生徒にとっても、学校生活の大きな宝となる経験です。ただ、夜間部を選んで入学してくる生徒からは、「そういう価値観が苦手」な様子が見えがえます。

そういう点では夜の学校は、生徒の人数も少ないので、全日制に比べるとかなり細やかに「個別の対応」を取ることができます。学校が柔軟な対応として個々の生徒の気持ちや行動を尊重できる分、生徒の選択には「自己責任」が求められます。社会生活では当たり前前のこのことですが、学校経験が少ない生徒には冷たく厳しく映るかもしれません。

ふつうと違う、「確かな」存在

一般的な「学校の価値観」に馴染むのが難しく、辛さを感じた子たちが多く入学してくる夜間部。生徒も教員も人数が少なく、生徒それぞれの事情に寄り添って柔軟な対応ができる夜間部。それでも、それまでの経験不足や、学習の目的意識が希薄な中、思い描いたような学校生活にならず、気持ちが途切れてしまう生徒も多い夜間部。そこには、いわゆる「ふつうの高校・ふつうの高校生」とは違う、でも確かに存在する「高校・高校生」の生活があります。

（つづく）